
S.エースG

咲野 璃歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S・エースG

【Nコード】

N5308B

【作者名】

咲野 璃歩

【あらすじ】

主人公高林裕希（女）が、性別を偽って男子校に入学し、バスケットボールの頂点を目指していく。そしてバスケを通してさまざまな経験、成長していくストーリー！。もちろん恋だってします。そんなラブコメディー

第一話：始まり（前書き）

この話にでてくるいくつかの学校名がありますが、実在するものではありません。

第一話：始まり

20XX年夏 -…

バスケットボール全国大会

女子優勝校、東京都立星祥中学校^{せいしょう} -。

その優勝校星祥中の女子バスケ部キャプテン、

たかはやし ゆうき
高林裕希

当時中学三年生。

は、身長178センチの大きいけど、細い体つき、肌は白くて、髪は黒髪のロングでポニーテール。そして容姿はとても女らしく美しい、そんな少女。見た目からして一際目立っていた。もちろん、バスケの腕前も中学生とはとても思えないほど一流。女子中学生のバスケ選手の中で彼女になう人、むしろ対等人すら誰一人といないほどの上手さ。そして周囲からの期待もすごく、世間では

「天才バスケ少女」

とまで呼ばれるほどの有名っぷりだった。

しかし、彼女は引退と同時に女子バスケット界からぱったりと姿を消した -。

この話はスポーツ雑誌でも一時とても話題になるほどだった。

彼女が消えた理由 -…。

それは、彼女は常に上を目指す志の持ち主なものだから女子のバスケでは物足りなさを感じていたからだ。

そして彼女はバスケでもつと上を目指したいがために、スポーツ専門の超名門といわれている高校、
私立奏波男子高等学校、
校名の通りだが、なんと男子校（しかも全寮生）に性別を偽って入学するなんて事を考えていたのだ。

1月-。

私立校の受験シーズン。

裕希はとりあえず合格内定。春からは男子高校生活のはじまり-。

このことは友達すら知らない。

卒業した次の日裕希は長い黒髪をばつさりと切った。

新しいスタート。

4月になり、

寮の入寮日が来た。

裕希は緊張と不安を抱えながらも寮に着く。

寮は二人一部屋の割り当てになっている。

とりあえず裕希は指定されている自分の寮部屋に荷物を置きに行くことにした。階段をあがって一番奥の部屋。

201号室

部屋に入ると、相部屋の相手がもつすでに來ていた。

なぜか裕希が部屋に入った瞬間、こっちをにらみつけるように見えてきた。

うわ…感じわる！

こんな怖い人と一緒

なんて…

裕希は後先うまくやっていけるか不安になった。

彼の名は神田仁。

（かんだ じん）

彼は、中学からのもち上がりの生徒で、かなりの勉強優秀者。はじめは感じわるくて気付かなかったけど仁も中学時代バスケットをしてしかもキャプテンで全国大会で優勝もしている、裕希も知ってるほどの、バスケット界の有名人だった。

裕希は仁に

「ねえ！去年のバスケの全国大会でこの学校の中等部優勝したよね？そん時神田くん…キャプテンやってたでしょ？」
と聞いた。

すると彼はなぜかキレた。

「……俺の前でバスケの事には一切触れなくてくんない？つざいんだよ。だいたいもうバスケなんてやってねーし。」

「…ごめん」

…どうやら今はもうバスケをやってないらしい。

そして仁は意味深な事を言う。

「てかおまえバスケの為にこの学校きたの？そんなだったらおまえの選択は間違っただな。」

「…え？」

…一体それはどういう意味なのだろうか。

「まあ、俺にはそんな事関係ないけど。」

第二話：噂

あの仁の意味深な言葉はどういう意味だったのだろうか。

その時はまだそこまで気にはならなかった。

入学式。

やはり男子校だけあって迫力がある。しかもスポーツ専門の学校だし、みんな体付きがいい人ばかりだ。

裕希はこんな中で女とバレずに学校生活を送っていけるか不安になった。

が、そうも言ってもらえない。

だって自分の決めた事だから。今更後戻りなんてできないしね。

昇降口近くにある掲示板に新入生のクラス名簿がはってある。

裕希の名前は1年6組に書かれていた。

「あ…」

神田仁とも一緒…。

仁とはあの意味深な会話をした時以来、まともに話していない。
…
ってか要するに初めての会話以来って事だね。

まあ、あんますぐ仲良くなってそれで油断してついボロがでてもや
だしね。

とりあえず自分のクラスもわかった事だし教室へ向かうか。

一年生の教室は4階。

階段をあがってすぐ目の前の教室が1年6組。

私の席は…っと。

黒板を見て自分の席を確認する。

真ん中の列の廊下側の前から3番目だ。ちょっと微妙な席。

そして自分の席に座った。

隣は誰だろう?と思い、
左を見ると、隣には神田仁。

また！？部屋も一緒に、席も隣？まちかい！
軽いシヨック。

そんなシヨックもつかの間、担任になる先生が来た。
よしだひでき
吉田秀樹

まあまあ良さそうな先生だ。

そして入学式の為体育館へ。

入学式は退屈だった。

… やつと入学式は終わって帰れる時が来た。

もう何人が友達もできて、うまくやっていけそうな予感。それに女
だつてバレル気配もない。よかった。

さあ、入学式も終わったことだし、さつそくバスケットでも見学しに
行こう！と思い、裕希は体育館へむかった。しかしバスケットは活動
していなかった。

どういう事…？

すると仁があらわれた。

「だからおまえの選択は間違ってるっつたんだよ。」

「…ねえ、なんで？どうなってんだよ！！」

「俺に聞くなよ。うぜえ。」

と言っ行ってしまった。

なんだあいつ！腹立つ。

夜、

仁にあの言葉の意味を聞いたさすがやはり話してはくれなかった…。

裕希はそれから毎日、朝と放課後、体育館へ足を運んだ。（朝はこっそりシュート練も兼ねて。）しかし、バスケット部が活動している気配はまったくなかった。

そんな日々が続いてもう1週間。

そんなある日…裕希はある話を耳にする。

その日の放課後、いつものように体育館へ向かっていた時…

前から来たバレー部の部員らしき先輩達が、

「もう、バスケ部はダメだな。あんな弱小部。」

「強かったのは今年卒業していった先輩の代までだもんな。」

「なんであんな弱っちくなっちまったんだろうな。」

「そりゃー、あいつのせいに決まってるだろ。」

「あー、そっぴゃ最近もまた問題起こしたらしいじゃん。」

「他の奴らまで巻き込まれちゃってかわいそー。」

「前はあんなヤツじゃなかったのに。」

なんて会話をしていたのだ。

……あいつ

……って誰？

しかもまた問題おこしてってなんだろう？

第三話：噂のアイツ

朝、

裕希はいつものように体育館をのぞいたが、やはりバスケット部が活動しているはずもなく…

しょうがないからシュート練習でも。

と、いつも持ち歩いているバッシュとボールを鞆からとりだして練習。

…きつとこんな勝手なことしてたら、ばれた時やばいんだろうな…；
とか思うけど、実際まだばれてはいないし、いっかー
みたいな。

…でもさ、ほんと一人でやってつまんないよなー。切ないねえ…。

…そんな、体育館の入り口の影から裕希を見ている一人の男がいた。

昼休み…。

ある男が裕希を尋ねてきた。彼の名は赤松貴史^{あかまつたかし}。三年生。
ちなみに朝、裕希を見ていたのはこの男だ。

赤松は裕希に、

「俺バスケット部のキャプテンの赤松貴史つていいいます。…君さ、今朝体育館でバスケットやってたよね？」

と聞いてきた。

「……!!??」

うそ！バレてる！？

しかも部長？これはまずいんじゃない？。どうしよう。

「ねえ、バスケ好き？」

えっ？

…どうやら怒ってるのかそういうった感じはないようだ。

裕希は

「はい…。」

と答える。

「…そっか。ごめんな。俺がこんなだから…、情けない。」

??

どういうこと？

「あのうー…？」

「あつ！ごめんね！なんか突然さ…」

「えっ?!はあ…」

この人は一体何の為に私の所へきたのだろう。

すると赤松は話を始めた。

「…ほんと数か月前くらいまではさ、普通に部活活動してたし、チームもかなり強かったんだけどさ。」

「前は…って、なんで？今は？今は何で…活動してないんですか？」

「…部活内に問題を起こしたヤツがいるんだ。」

…あつ！

裕希はあの時ちょっと小耳に挟んだ噂を思い出す。

「そいつのせいでもう何回も部活停止になってんだ。でも、やっと一昨日部活停止期間が解除になって活動再開できるようになったんだ。けど、部員がもう馬鹿馬鹿しいつつて…一人も戻ってこないんだわ。」

そういう事だったのか。

なるほど。だからか、部活やってなかったのは。

神田が言ってた言葉の意味も…。こういうことだったんだね。

「それで…その問題を起こした人っていうのは…？」

「ああ、早坂勝はやさかしょうってヤツなんだけど…。」

早坂勝？

…どっかで聞いたことある名前。

自分のあるかぎりの記憶をよみがえらせ彼の名前を思い出そうとす

る。

！！！？

そっだ！思い出した！

「早坂って…中学の時のバスケの有名選手じゃ…。バスケの実力はもちろん、見た目もよかったからコートに立つただけですごい存在感で、会場内の人々を魅了したとか…。」

「そう。その早坂のせいでみんなを巻き添えにして、バスケ部を今のこんな状態に陥らせたんだ。」

第四話：早坂 勝（前書き）

赤松の口から早坂の過去が語られます。

第四話：早坂 勝

…なんだよ！それ！

その早坂って人のせい？

裕希は早坂勝をうらんだ。

「前はさ、あんなヤツじゃなかったんだ。」

そういつて、赤松は早坂の過去を話しだす…。

『彼はね、前はすごくまじめで誰よりも努力家で、ほんと練習熱心で、すごいスピードで実力をあげ、夏まえくらいの時期には、まだ一年生だったのに、二、三年生をさしおいてスタメン入りしたんだ。

そして直ぐ様、チームの強い戦力、エースになった…。

しかしスタメンに選ばれて、彼にとって高校初の試合の時、怪我をしてしまったんだ。

その怪我は今後バスケをやっていくうえで支障になるような怪我じゃなかったんだけどすごく落ち込んだ感じで、しかも、その怪我は事故とかではなくて今年卒業していった先輩達の仕業だったって事で事がわかったんだよね。

それに親の離婚とかでね、いろいろ彼に精神的に負担がかかるような、そんな最悪な事ばかりが一気に重なっちゃって、立ち直れなくなっちゃったんだよ。

…それから彼変わっちゃったんだよね。

部活にもでなくなつて、遊んでばかり。良かった成績は下がって

く一方。かなり彼…荒れちゃったんだよね。

そこで事件が起きたんだよ。

最初に事件が起きたのは二、三か月くらいまえだったかな。

その日もまあいつも通り練習してたんだけど、ほんと突然、彼が数か月ぶりに部活に顔をだしたんだ。その時の彼はもう見た目からして変わり果てていたよ。

でさ、部員のあるヤツが、彼が来たことが気に入らなかったらしく、

「なんだよ！いまさら！くんじゃねえよ！」

って啖呵きつたんだ。

そしたら彼すんごいブチ切れちゃって、そいつボコボコにしちゃったんだ。みんなで止めにかかったけどあの力の強さには年上だろうが先生だろうが誰一人逆らえなくて、その後早坂は停学。そして部活も停止処分になっちゃって、それがここんとこ何回も続いちゃって、そのせいでまともに部活もできないもんだからみんなやる気失せて、活動再開できるようになったってのに戻ってこないし…。って状態なんだよね！』

「いやいや…ごめんね…説明長くて。」

「いいえ。それ聞いて今の状況よくわかりました。」

「…まあ、こういうことだからさ。君が…バスケやりたい気持ちわかるけど…こんな事…部長の俺が言うような事じゃないけどバスケあきらめた方がいいかもね…。…じゃあ。」

…そう言って赤松は去っていった。

そんな…。

あきらめるなんて簡単に言っけど…そんなの無理だよ。

裕希はかなりのショックを受け、その場に茫然と立ち尽くしていた。

第五話：励まし

夜 -。

寮に帰ってからずっと、裕希は深く落ち込んでいた。

はぁー。私…何の為にこの学校に来たんだろう。こんなことだったらおとなしく女子校通ってバスケ続けてた方が良かったのかな。
…と何度も思った。

目からは涙が溢れ、そしてこぼれていく…

幸い、部屋の相方はいない。

良かった。

泣いてるとこなんてみられたらみっともないし。

…とか思ってた直後、

絶妙なタイミングで仁が部屋に戻ってきた。

…え?! うわ! うそ!

裕希は慌てて顔を隠したけどもう遅い。

隠す前にすでに仁と目が合ってしまったから。

しまった。

と裕希は思った。

…仁はというと裕希の泣いている顔を見て何とも言えずつつたた
まだまだ。

…しばらく沈黙がつづき、二人の間には気まずい雰囲気が漂っていた。

そして先に口を開いたのは仁だった。

「…………じゃあ、俺寝るわ。」

仁はこの気まずさに耐えられなかったのと、なんかいやな予感がしたのでさっさと寝てしまおうと思った。そしてベッドに入ろうとした瞬間-。

裕希は仁のＴシャツの裾をつかんで仁が寝ようとしてたところを阻止した。

あーうぜえ…

やな予感的中。と

仁は思った。

まだ裕希はズビズビと泣いている。

仁は裕希のいつまでもうじうじ泣いている姿に腹が立って思わず怒鳴った。

「おまえ男のくせになに泣いてんだよ！！情けねえ！おまえは何の為にここの学校に来たんだよ！？バスケやりてえからじゃねえの？しっかりしろよ！」

その仁の言葉で裕希は目がさめた。

そつだ。今私は女じゃないんだ。男としてここにいるんだ。こんな弱音はいてる場合じゃない！

裕希はさつきからずっとこぼれ落ち続けていた涙を両手で一気にぬぐった。

「うん。ゴメン。何泣いてんだ俺。男なのに。」

「ほんとまじで男が泣くんじゃねえよ……。気持ちわりいし。」

「……たぶん、……もう泣かないから大丈夫だよ　よし！頑張らないとな！！俺」

裕希は元気を取り戻したようだ。

「……そつだね。頑張れ。」

「……うーん、まさか神田なんかに励まされるとは思わなかったよ！　まあ、ありがとなっ！」

そつ言つて裕希は満面の笑みをみせた。

……それを見た仁は、

「……おまえ……」

「ん？何？」

「……なんでもねえ。寝る。」

「うん。おやすみ。」

そつ言つて裕希も部屋の電気を消して布団に入り就寝。

仁はどうやらあの笑顔を見て何か思い出したのか。それとも…？

第六話：始動

「んー、いい朝だ。」

すっかり立ち直った裕希。

そして自分の勉強机に置いてあるバツシュとボールを見ながら裕希は、

やっぱ私バスケあきらめられないみたい。

だから私頑張るよ…。

と心の中で誓った。

仁が起きてきた。

「あつ！神田！おはよー」

仁はあまりに元気な裕希にびっくりした。

は？ありえねえ。もう立ち直ってんの？

と思った。そしてボソッと

「…昨日の泣き顔はどこにいったんだかね。」

とつぶやいた。

…ボソツと言ったはずなのに裕希にはばっちり聞こえていたようだ。

「今なんか言いました!？」

「いいえ。なんでもないです。」

昨日は…

ほんと神田に救われたな。なんかちよつとはいいいヤツなのかも。それに昨夜の一件でちよつとはしゃべれるようになった気がするし。良かった。

思い切って

「神田!一緒に学校いこ?」

と誘ってみた。

しかし、

「何言ってるんだよ!調子のんなよ!」

と言って先に部屋を出ていかれてしまう。

あーあ、行っちゃった。

裕希は昼休み、ある人の所へ向かった。
教室をでてすぐの階段を降りて3年生の階へいき、

裕希はそのある人、
バスケ部の部長赤松を尋ねる。

そしてバスケ部に入部したいと言うことを告げた。
赤松は非常にびっくりした様子だった。

「……………入部するの？」

「はい！」

「…入部するのはかまわないけど、今は何一ついいことなんてないよ？大丈夫なの？」
と裕希に問う。

裕希は

「かまいません！俺はバスケをするためにここに入学したんです。
どうしてもあきらめるわけにはいかないんです。絶対…！立ち直らせてみせます！奏高バスケ部を…！」

と非常に強い意志と、まっすぐな想いを述べた。

赤松にはその想いが伝わってきていた。

…そうだよな。俺もしっかりしないと。

と赤松は思った。

赤松は裕希の想いに心が揺れ動かされ、自分もバスケットが好きだという気持ちを改めて強く思い起こされた。

それから裕希は赤松と一緒に、毎日のように部員達に声をかけ戻ってきてほしいと交渉し続けた……。

…そして半月後、

裕希と赤松の必死の努力が実り、やる気を取り戻した部員達が戻ってきた。

そして前から入部したがっていたが前までの部活の状況に入部しづらがっていた一年生達も部活に入部してきた。

裕希や赤松の熱意はみんなにちゃんと伝わっていた。

裕希はうれしくて泣きそうになっていた。

やっとの想いでバスケットができる。

さあ！部活始動だ！

…そんな部活風景を影から早坂がみていた。

第七話：早坂 勝（2）（前書き）

七話からしばらく早坂のからだ話がつつぎます。

第七話：早坂 勝（2）

「……」

バスケット部のみんなが楽しそうに練習している姿を目にした早坂は体育館から去っていった。

そして早坂はその光景を何度も思い出しては、むしゃくしゃし、街を歩いていた。

そんなとき、すれ違う他校の男子生徒とぶつかる。

早坂はカッターとなって相手を殴った。そしてケンカになってしまう。

また停学となってしまったのだ。

次の日。

停学になったもんだから掲示板に停学者として名前が貼りだされていた。

早坂勝

裕希は掲示板の前に茫然と立ちつくしていた。

「……」

早坂って…。

あのバスケ部の問題児…

また問題起こしたってか？

「また早坂か。」

「え？」

自分の隣りをみると部長の赤松先輩がたっていた。

「これで2、3日は安心して部活できるんじゃない？」

とにこやかに赤松は言った。

「…はい。」

裕希はなんとなく胸の奥で早坂の事がつかかってモヤモヤしていた。

「けど、

そんな事考えている場合じゃない！私は女で人一倍努力しないとついていけない身なんだから！

と、

たちまち裕希は部活の事で頭がいっぱいになった。

－放課後、

待ちに待った部活♪

「じゃあ、部活は始めるぞ。一年は外周。2、3年はシュート練だ。」

「はい!!」

「あー。しよっぱな外周かよー。」

今年の一年生部員は裕希を合わせて4人。どの人もわりと名の知れていた人ばかり。

それに男と女じゃ体力の度合いが違う。持久力も速さも違う。でもめげずに頑張る裕希。

夜の9時半、練習終了。

一年生は結局、ボールに触ることはなかった。筋力トレーニングがメインだった。

つかれたー!!!

男の練習メニューをなんとかこなした裕希はくたくただった。

…男ってのはこんなきつい練習してんのか。女子とはまるで大違い

だ。慣れるのに時間かかりそう。

でも、楽しい！

こんな充実した練習は初めてだ！

帰り道。

ボールをつく音がした。

なんだろ。誰かがバスケやってんのかな？

その音の聞こえる方向に近づいていく裕希。

その音の先には公園があった。

公園だ！こんな寮の近くに公園があったなんて…。

見てみるとバスケットゴールもある。

そして予想通り誰かがバスケットをやっているようだ。

誰だろう…。

とりあえず男つてのは確かだ。身長は結構高くて、髪の色は明るい茶色で長めの髪の毛。

…なぜか

彼の姿に目が離せない。

第八話：早坂 勝（3）

裕希は彼の動きに見とれていた。

可憐で美しく無駄がない。見とれてしまう上手さだ。

ちょうど彼が汗を拭っている時、見ていたところを気付かれてしまった。

「誰だよ。」

「……すごい。」

「…は？」

いきなりそんな事を言うもんだから思わず顔を赤らめた。

「なんでそんなにうまいんですか？もったいない！バスケット部入ればいいのに！」

裕希はもつと彼を誉めたたえる。

「いやいや・何言ってるんだよー！って！何言わせんだ！俺は…あんなバスケット部こつちから願い下げだ！嫌いなんだよ。」

え…？？うそ！

もしかしてこの人。

「早坂さん…？」

「!？」

なぜか彼はあせった。

やっぱり…。

この人絶対早坂勝だ。

「部活…来ないんですか？」

「てめえみたいな…だいたい誰かもわかんねえ奴にそんなこと言われる筋合いはねえ！消えろよ！」
ときつい言葉を言って去っていった。

あれが、

早坂先輩かぁー。

ふーん。

裕希はあることを考えた。これは一つの賭け。
もしかしたら早坂先輩は…と思って、

裕希は

次の日、その次の日と

早坂がバスケットをやっていた公園をわざと通って帰ることにした。

…やっぱり。

早坂はバスケットをやっていた。

「ほんとにバスケット好きなんですよね？早坂先輩」

ちょうど早坂が休んでる隙を狙って缶ジュースを渡しながらきいた。

「またお前か。消えろつつたのわかんなかったのか？」

「いやです！」

「お前頭わりいな！」

早坂は裕希の胸ぐらをつかんで一気に持ち上げてしまった。

この人怖い…。やっぱり只者じゃないよ。でもここで引いたら負けだ！

「…わかってないのは早坂先輩なんじゃないんですか？」

裕希は声も体も震えていた。それが早坂にもわかったのか、持ち上げていた裕希をおろして突き放した。

「痛っ…」

「…俺はもうバスケットなんてやめたんだよ！やめてくれよ！こういう

ことすんの!! まちで余計なお世話なんだよ!」

でも裕希は見てしまった。

そうやって強がって言う言葉とは裏腹にその顔はとても淋しそうで切なそうだったのを…。

彼はやっぱり今でもバスケットが好きなんだ…。

悲しそうに去っていく早坂の姿をずっとみていた。

第九話：早坂 勝（4）

次の日の放課後。

部活練習中に晴れて謹慎から解放された早坂がきた。

みんながざわめきだす。

「へえ。最近静かだと思ってたのにどうしたの？みんなまじめになつて練習なんかしちゃって。ばかじゃねえ？」

と早坂はどうやら文句を言いに来たようだ。

早坂の言葉にみんな静まりかえった。

そんな中、赤松がキレた。

「何しに来たんだよ！そんなこと言いに来たのか？お前は！」

「……………」

「なんとか言えっ！」

「…ああ。そうだよ。お前等みたいなクズ！バスケやる価値もねえ

よ！」

「バスクやる価値もないクズはおめえだろーが！」

と赤松が言っていると早坂はカツとなって顔を赤らめ、赤松になぐりかかろうとしたところに裕希が間に立ち入った。

バシッ！！

早坂は裕希を殴ってしまった。

早坂は殴ろうとした人じゃない人を殴ってしまったことに戸惑っていた。

「……いつてー！！そんな風にみんなに迷惑かける気力があんだったらいくらかでもバスケに力そそげたんじゃねえの！？本当はバスケやりたいくせに！バスケ好きなくせに！」

「……！！」

「……部長。早坂先輩は謹慎中ずっとバスケやってたんです。」

「…余計な事いつてんじゃないよ！」

と言って、早坂は体育館を出ていった。

「…そうだよ。あいつの言うとおりだよ。俺は今もバスケットが好きだよ！…でも今更どーしろってんだよ！わかんねえよ………」

みんなに迷惑な想いさせたいわけじゃないのに…
うまくいかない…

早坂も早坂なりに悩んでいたのだ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5308b/>

S.エースG

2011年1月12日15時34分発行